

## 「嵐を静める」

2021年12月27日

イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。イエスは言われた。「なぜ、怖がるのか。まだ信仰がないのか。」弟子たちは非常に恐れて、「一体この方はどなたなのだろう。風も湖さえも従うではないか」と互いに言った。(マルコ福音書4章39節～41節)

福音書には、主イエスが行った奇跡が多数、記されている。奇跡は、人間に関するものと、自然に関するものがある。人間に関する奇跡は、主イエスの苦しむ人への慈しみが描かれ、人間へ復帰する喜びを伝えている。自然に関する奇跡は、ほとんど、あり得ないと思わされる。しかし、これは、著者たちの主イエスに対する信仰告白で、史実として捉える必要は全くない。彼らの信仰告白から、私へのメッセージが伝わってくる。

主イエスの話を聞こうと大勢の群衆が押し寄せていたが、夕方になったので、主イエスは、「向こう岸に行こう」と言われ、群衆を後に残し、弟子たちと共に舟に乗り込まれた。他の舟も一緒に、漕ぎ出した。すると、激しい突風が起こり、波が舟の中に入り込み、舟は水浸しになった。ガリラヤ湖は水位が海面より200mほども低く、すり鉢の底に水が溜まったような湖である。周りの山々から風が吹き下ろしてくると、突然、嵐に見舞われることがあった。漁師であった弟子たちは、幾度か、この嵐を経験していたであろう。主イエスと弟子たちの一行は、この嵐に遭遇した。その時、主イエスは、艫の方で眠っておられた。嵐の最中、平安に寝ておられた訳である。弟子たちは、主イエスを起こして、「先生、私たちが溺れ死んでも、かまわないのですか」と言った。この弟子たちの言葉は奇妙である。彼らはガリラヤ湖の嵐を幾度も経験し、ナザレの大工であった主イエスに聞かずとも、対処する術を知っていたはずである。彼らは自分たちの力で嵐を乗り越えなければならないのに、「おぼれ死んでも、かまわないのですか」と、まるで主イエスに責任があるかのような言葉を吐いている。岩波訳聖書は、「先生、私たちが滅んでしまうというのに平気なのですか」と訳し、嵐の最中、眠って、黙する主イエスに文句を言っているようである。

主イエスは、起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。死ぬかと思って恐れていた嵐は止み、静かな湖に変貌した。神の子イエスは、荒れ狂う湖をも、御言葉によって静め給うと伝えている。これを見た弟子たちは非常に恐れ、「一体この方はどなたなのだろう。風も湖さえ従うではないか」と互いに言い合った。この奇跡は何を伝えているのであろうか。

舟は教会を意味し、嵐はこの世の苦難を表すと解釈されている。教会は、この世に船出し、時として、大きな嵐・苦難に出くわす。マルコ福音書が書かれた数年前、ローマのネロ皇帝によって、クリスチャンは激しい迫害を受けた。ペトロを始め、使徒たちは殉教させられ、多くのクリスチャンが十字架につけられ、猛獣に食い殺される惨劇を経験した。その時、教会では熱心な祈りが捧げられた。「主イエスよ、私たちがこのように無残に殺されても、構わないのですか。平気なのですか」と、助けてくれない神の沈黙を嘆く祈りであった。その祈りに対し、主イエスは、「黙れ。静まれ」と宣言し、迫害の嵐を静めてくださる。信仰をもって嵐を乗り越えた著者は自分の経験を、この記述に託したのではないか。

人は皆、嵐に遭遇する。嵐の時、風と波の力を恐れ、嵐の恐怖だけに目が向く。しかし主イエスは、その時も共にいて、嵐を乗り越え平穏な所に導いてくださる。私は嵐の中から、主イエスの「黙れ。静まれ」の宣言によって、何度静かな湖に連れ戻されたことか。